
只今、工事中

石川美希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

只今、工事中

【Nコード】

N5531D

【作者名】

石川美希

【あらすじ】

ありふれた人たちのたったひとつの物語

・はじめに・（前書き）

マイペース更新となりますので作中の人物がどうなるのか、どうな
って欲しいか、まったり考えながらお読み頂けるとベストです。

・はじめに・

人はみんな未完成。

完璧を目指すけど、どんなに年を重ねても完成することなんてない。

けどそんな”工事中”の人間が過ごす毎日、
何でかとても輝いているんだ。

途中下車

もう今年で四回目の受験。浪人三年なんてそんな珍しいもんじゃないだろう？志望先は県内で一番の大学だし、しかも法学部だし、予備校にはもう六回目のチャレンジャーだっている。

俺は浪人生という肩書きを恥ずかしいとは思わない。

けどいつまでもこのままではいけないことくらい分かっている。受かって初めて意味を持つ毎日を過ごしているんだ。結果を出さなければこの四回の挑戦は俺のマイナス要素として一生ついてまわる。分かってる。分かってるんだよ。

「あんた、今年だめだったら就職しなさい。」

餅はふたつがいいと雑煮を作る母ちゃんに言って返ってきた言葉だった。

それが聞こえたのか、たまたまなのか、妹のみきがテレビの音量を上げた。

「母ちゃん、受験は精神の戦いなんだよ。だめだったらなんて考えてる奴がだめになるんだ。俺はそんな奴を何人も見てきた。いや、去年までの俺がそうだったのかもしれない。けど今年は違う。三月七日。入学手続きの日だ。母ちゃんはこの日に入学金を用意できるか。それだけを考えていればいいんだよ。あ。餅はふたつね。」

これでいつもの感じに戻るだろ。

しかし母ちゃんは本気だった。

「それはいいけど。もし落ちたら、働きなさい。いいとこ見つからなかったらお父さんのとこで使ってくれるって。」

「おう、ありがたいねー。」

俺は二階にある自分の部屋に早足で向かった。ベッドに倒れ込むと同時に涙が溢れてきた。

ついに、ついに言われてしまった。このどうしようもない気持ちをなんとかしたくて携帯を手にしてアドレス帳を開く。電話は出来ない…。

『あけおめ！正月を制する者は受験を制す！俺、頑張ってます ほめてあげて下さい（笑）』
すぐに返事が来る。

『えらいえらい（笑）んで、何があったのよ？』
びつくりしたが心の奥でホツとする。やっぱり気付いてくれた。

メールの相手は大堀奏多浪人することなく美大に通っている。中学の時に同じクラスになり、学級委員を任されたのをきっかけによく話すようになった。

大人しそうな見た目とは裏腹にざっくりした性格で男女がまわらず好かれてたと思う。高校も同じだったし、なんとなく相性がいいらしくいつの間にか何でも話せる仲になっていた。決して頭がいい奴じ

やないけど人の変化に敏感で、はっきり言いたいことを言えない俺にとつてはとてもありがたい存在。

『お前って神？（笑）俺、お前より先に社会人なっちゃうかもなの！。』

『なのー。じゃないだろ（笑）もうぶらりは今年でやめろって？』

（笑）が多いのは真剣な空気を作ると逆に核心から遠のくのをお互い知ってるから。

『びっくりしたよ。』

「俺お餅2個ね。」ってかわいく言ったら

「あんたぶらり禁止ね。」って返されちゃった（笑）」

『そりや笑うしかないな』（笑）まー、あれだ。お前追い詰められると腐るから、聞かなかったことにしてお雑煮食べてきなさい（笑）

」

『完全に忘れてた（笑）幸子の雑煮食って勉強しますかー。』

送信ボタンを押して充電器に携帯を置いた。メールを打っている内に涙は止まっていたが念のため洗面所で顔を洗って下に降りた。

「あ。今呼びに行こうと思ってたところ。」

階段を降りた所にみきがいた。

「お餅、三個入れちゃったってお母さんが。」いたずらに笑いながら前を歩く。

「あんなに言ったのに？うちの母さん頭大丈夫なのかよ。」少し笑いながら返す。

「お母さんもいっぱいいっぱいだっतんでしょー。言う方も辛い訳さ。まさに愛の鞭だね」そう言いながらくるっと角を回ってリビングに入ってしまった。

「お前人事だからってなあー。」聞こえているか分からないけどそう言っただけ俺も後に続く。

みきは今年高校を卒業する。同じ受験生のはずがすでに推薦で奏多と同じ美大に決まっいて俺の肩身はさらに狭い。

けど3年も浪人出来たのはみきが優秀な妹でいてくれたおかげでもあるし、家の中では一番俺の気持ちを感じてくれていると思う。

多分さつき泣いてた事とかも分かって俺がそれに気付かれないようにしてるのも分かってたはず。

そういう所が奏多みたいでちょっと怖いんだけど。美術を学ぶ奴らは観察眼がすごいってことなんだろうか。

何でもなかったようにテレビを見ながら雑煮を食べて部屋に戻った。「やっぱり餅三個だと胃がもたれんだよな…」つぶやきながら机に向かう。

ふと見ると充電器に置かれた携帯が光っている。

（奏多かな…？）

□ 呼び出し

『ちよつと今から別荘まで出てこれないかな？』

メールの相手は奏多じゃなかった。返事をしてちよつと髪型を整えてから下に降りる。

「ちよ、出かけてくるけどすぐ帰るから。」

台所を片付けている母ちゃんに向かって言い、返事を待たずに玄関へ向かい外に出た。

ここ2、3日家から出ていなかったせいか雪道を歩く足が何となくぎこちない。

「おじさん、あけましておめでとう。」

5分くらい歩いた所でちゃりんちゃりとドアについた鈴を鳴らしながら店に入る。

「おう、こうちゃん！あけましておめでとう。お年玉はないぞー。」

二カつと笑い、そう言ったおじさんは奏多のお父さん。

おじさんは経営が厳しくなった喫茶店を前のオーナーから赤字含めて引き取ってその人柄のおかげなのかあつという間に客足を伸ばして黒字に戻したという伝説の持ち主。

奏多のお父さんがいる上に店が中学や高校と家の間にあるから昔からよく遊びにきたり待ち合わせに使っていたりして愛着のあるお店だ。おじさんがいるから第二の大堀家という意味で通称【別荘】この辺で通じない人はいない。

「わざわざお年玉もらいに来たんじゃないよ。佐々木、来てない？」

「ああ。来てる来てる。ほら、あそこだ。」

おじさんが指差した奥のテーブルに目をやると、こっちに背を向けて座っている姿を見つけた。

歩いてそこまで行き、向かいの席に座ると本を読んでいた顔を上げてイヤホンを外した。

「あけましておめでとう。」にこっと笑いそう言つと、

「うん、おめでと。今年もよろしくね。」と彼女もまた微笑みながら返してきた。

「こうじくん、あたしたちって付き合ってるんだよね？」

「……………え？」

予想外の質問に戸惑うことしか出来ない。ちなみにこうじくんは俺のこと。

「はああー…やっぱりね。」

深いため息をつく彼女に訳も分からず申し訳なさを感じる。

「この前のクリスマスパーティー、ここで食事した後みんなでカラオケ行つたでしょ？」

「あー。うん。」

確かに高校の友達みんなで遊んだ記憶がある。

「よし、そこは覚えてるのね。でも途中で部屋出て廊下で私と話した事は覚えてないんだ？」

佐々木はカップの中のコーヒーをスプーンで回しながら確かめるように話す。その手元を見ながら記憶を辿るが、お酒を飲み始めて男だけでさくらんぼを歌った所までしか記憶がない。

思い出そうと黙り込んでいる俺を見かねて佐々木は再び口を開いた。

「あたし、こうじくんに告白したの。」

「あー…なるほど。」事情が理解出来たのと同時につい呟いてしまった。酔っ払った俺はその告白にOKしたにも関わらず記憶が飛んじやってて今の今まで佐々木を放置し、呼び出してみればアホ面で普通に参上してしまった訳だ。

「とりあえず、ごめん。」

自分が悪いのは分かったがどうしていいのか分からずそう言いながら視線はあやふやな方に向いていた。

「いいよ別に。あたしもこうじくんが酔ってるの分かっててタイミング狙って言ったつてもあるし。記憶なくなるの予想してなかった訳じゃないから。でも…」

そこまで言っただけで黙ってしまった。泣かせてはまずい。

「や、あの俺に責任あるんだし別に付き合っのが嫌とかじゃなくてただびっくりしたっていうかその…」

「おうおう修羅場だねえ。」

おじさんがコーヒを持ってきていたずらに笑ってそう言った。

「い、いいから！コーヒーありがとう。早く戻って戻って！」

何故か焦ってる俺がそこにいた。

「ふふ。違うの。こうじくんを責めてるんじゃないってちょっと、ね。」

「怒ってるのではないと分かったが彼女はまだ難しい顔をしたままだった。」

救世主

それから沈黙になり、俺はなんだかよく分からないままコーヒを飲むしかなかった。

今の俺たちは彼氏と彼女なのか友達なのかはつきりしないこの時間がたまらなく窮屈で、何とかならないかと悩んでいると入口からまたちゃりんちゃりと鈴の音がした。

沈黙を破ってくれた救世主は奏多だった。

俺が目を向けたのとほぼ同時におじさんが俺がいることを教えたのだろう。奏多とぼつちり目が合った。

「何してんの？」

苦笑いでそう言いながらこっちに向かってくる。

今度は奏多の視界に佐々木が入ったのとほぼ同時に佐々木が奏多の顔を見て二人の目がぼつちり合った。

「「あ。」」

そして見事にハモった。

そのまま何故か誰も口を開こうとしない。この二人、昔から仲は良いはずなんだが…今日は本当に訳が分からない事だらけだ。

どうにか沈黙を破るべく慌てて俺は口を開く。

「お、俺さ、彼女出来てたんだぜ！」場を和ませようと奏多にはにかみながら言った。

『出来てた』って何だよ！と突っ込みが入り、ちよつと笑いが起こり、さりげなく佐々木との本題に戻せるというここの一番の台詞だと思つた。

しかし

「ああー、うん。」

奏多はこれだけ言つておじさんのいるカウンターの方へ行つてしまつた。

「え…知つてたの？」奏多の背中に向かつて質問なのか独り言なのか分からないようなトーンでつい言つてしまつた。当然返事はない。

「あの日、こうじくんを家まで送つて行つたの奏ちゃんだから。」

代弁するかのように佐々木が言う。

なんだよあいつ…その後何回か会つてんだから話題に出しとけよ…

「ただ単に忘れてたんじゃない？」

口に出していない俺の言葉に返事がきた事に驚いた反動で少しコーヒーを溢してしまふ。

「それが言いたくなかつたか…」

「え？」

溢したコーヒーを拭く事に必死だつた俺は佐々木が何を言つたのか分からなかつた。

「あ。ごめん、これからちよつと家族で出かけるんだ。またメールするね。」

携帯で時間を確認したのか慌ただしく帰り仕度を始める。

「何かほんとごめんな。俺もちゃんと考えるから…」

「いいのいいの。急に呼び出したのに来てくれてありがと。じゃね。」

「あ！俺が…」

佐々木はパツと伝票を手にして行つてしまつた。

今日の俺って男として終わってんじゃないか…？

鈴の音が鳴り、外から俺の席に手をふる佐々木がいた。

油断していた俺は慌てて笑顔を作り手を振り返す。

佐々木が顔を進行方向に移したので俺もテーブルに視線を落とす。

一息ついてカウンターを見た。

さっきとはうってかわってにこにこした奏多がカウンター席から俺に手を振っている。

（あいつ…）

「お前なあー」

笑顔で怒った風に言いながら俺もカウンター席に向かう。

何がなんだか分からないが佐々木がいなくなって安心してゐる俺がそこにいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5531d/>

只今、工事中

2011年1月12日23時45分発行